



RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY

酪農学園大学

出会

No. **81** 2020. 3. 19

キリスト教委員会



「神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大きに置いて、地を照らせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。」

(創世記1章16-18節)

写真は本学の冬の風物詩となったヒンメリです。

隠されてしまった平和 (ルカ福音書19章41-42節)

——消極的平和から積極的平和へ——

大学宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室 小林 昭博

狼の群れのような世に向かって

環境共生学類 資源再利用学研究室 押谷 一

「新たな希望を抱いて三愛精神に繋がる」

学校法人酪農学園宗教主事 朴 美愛

考える力

食と健康学類 応用生化学研究室 長谷川靖洋

隠されてしまった平和（ルカ福音書19章41－42節）

——消極的平和から積極的平和へ——



大学宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室 小林 昭博

⁴¹そして、イエスは〔エルサレムに〕近づいたとき、かの都を見て、彼はその都について哀しんで⁴²言った、「もしかの日にあなたが平和へと至る物事を知っていたならば……。だが、今それはあなたから隠されてしまった」。

（ルカ福音書19章41－42節〔私訳〕）

エルサレム入城

冒頭のイエスの言葉は「エルサレム入城」（ルカ福音書19章28－44節）と呼ばれる聖書テキストの一節であり、エルサレムを間近に見たイエスの第一声が記されています。常人であれば、大都市エルサレムの壮麗さに圧倒され、エルサレム神殿の荘厳さに胸を熱くするはずですが、イエスはこの都の栄華を見て、エルサレムから平和が隠されていると哀しんでいるのです。

栄華を極めたエルサレム

エルサレムに類する地名の初出は今から四千年前の紀元前20世紀まで遡ることができますが、この都が最も華やいだのは紀元前11～10世紀のダビデ・ソロモン時代でした。ヘブライ語で「都市」を意味する「ギール」は「城壁で囲まれた町」を意味しますが、ダビデ・ソロモン時代にエルサレムはカナンを代表する都市として繁栄していました。「栄華を極めたソロモンでさえ」（ルカ12章27節）というイエスの有名な言葉は、この時代のエルサレムの繁栄を言い表しています。

もっとも、イエス時代のエルサレム

も人口が5万人～10万と推定されるギリシャ・ローマ世界の「ボリス」に相当する大都市でした。大きな祭りのときにはエルサレムには数十万人が押し寄せたと予想されます。しかし、このような都市文化を誇った城壁で囲まれた都エルサレムを見て、イエスはこの都から平和が隠されてしまっているとの哀しみを露わにするのです。

隠されてしまった平和

ヘブライ語で「エルサレム」（イェルーシャーライム）は「平和の所有」や「平和の基」を意味します。ですから、イエスが哀しんでいる理由は、その名にはっきりと刻まれているはずの「平和」がこの都から隠されて見えなくなってしまうことにあります。

では、イエスはエルサレムからいったいどのような平和が隠されていると考えていたのでしょうか。そのヒントは「エルサレム」の語に含まれる「シャーローム」（平和）というヘブライ語に隠されています。古代近東語であるセム語（ヘブライ語、アラビア語など）では、「平和」を意味する語（シャーローム、サラームなど）は「安全／安心／平安／安寧」といった意味を表します。そして、この語は普段の

挨拶でも使われていましたので、平和とはシャーロームの挨拶を日常生活において普通に交わせる状態を表していたのです。

それに対して、イエス時代の古代地中海世界はローマ帝国が覇権を握り、そこで用いられていた国際語のギリシャ語とラテン語では、「平和」(エイレーネー、パクス)は「戦争のない状態」を表しています。つまり、平和とはローマ帝国の圧倒的軍事力によってもたらされた見せかけの安定のことであり、何か騒乱が起こっても、すぐにローマ軍が鎮圧し、平定されていた世界を平和と呼んでいたに過ぎなかったのです。

そして、イエス時代のエルサレムはまさにローマ帝国に怯えていました。しかも表面上の平和と繁栄を享受できるのは一部のユダヤの支配層や富裕層に限られており、華やかに見えるエルサレムの都市は現在で言う格差社会でもあったのです。したがって、表面上は繁栄を誇っていたエルサレムですが、その実態は日常生活から「平和」(安全／安心／平安／安寧)が隠されてしまっている世界になっていたのです。それゆえ、イエスはエルサレムの平和がまやかしかることを見抜き、その現実を「今それはあなたから隠されてしまった」と言って哀しんでいるのです。

消極的平和から積極的平和へ

このようなエルサレムの隠されてしまった平和という事態、そしてギリシャ・ラテン語の「平和」とヘブライ語の「平和」の概念の相違は、平和学の「消極的平和」と「積極的平和」の概念に合致します。すなわち、現代の平和学では、消極的平和が戦争や武力衝突のない状態を表すのに対して、積

極的平和は飢餓や貧困、差別や抑圧といった構造的暴力がない状態を言い表しているからです。そして、平和学では真の平和とは積極的平和(積極的平和主義とは別物)のことであり、衣食住が保証され、人権や福祉が守られ、民族やジェンダー、セクシュアリティによって差別されることのない社会として理解されているのです。

卒業生のみなさんがこれから出て行く社会には、残念ながら積極的平和があるとは言えません。また、国際社会には消極的平和すらない地域が数多くあります。イエスはエルサレムの表面上の繁栄ではなく、その背後に隠されている問題を見通し、平和が隠されてしまっている状態を哀しみ、真の平和を実現するために活動し続けました。

酪農学園大学で「三愛主義」(神を愛し、人を愛し、土を愛する)を学んだ卒業生のみなさんは、日本だけではなく、国際社会でも活躍していくと思います。これからの人生において、自分が生活する社会を見るときに、平和が隠されていることを哀しむイエスの姿を想起してください。そして、みなさんが身を置く社会に隠されている問題を見通し、そこに隠されている人々の哀しみに気づくことのできる存在で在り続けてください。みなさんが真の平和である積極的平和を創り出してくださいことを信じています。

【イエス時代のエルサレムの復元図】



(Accordance Bibleの挿絵より)

狼の群れのような世に向かって



環境共生学類 資源再利用学研究室 押谷 一

卒業式を迎えられた諸君、おめでとうございます。旅立ちにあたり次の言（ことば）を贈ります。

「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ」（新約聖書・マタイによる福音書第10章16節）。

これはイエス・キリストが弟子たちに語ったと聖書が伝えている言です。

イエスは弟子たちを世に遣わすのが、羊の群れの中に羊飼いを送るのではなく、むしろ狼の群れの中に羊を送るようなものだと、弟子たちを弱い羊に例えています。イエスの考えによれば当時の世の人びとは、飼い主がいなくて途方に暮れている羊ではなく、羊を襲う狼として捉えています。

危機的な現代社会の課題

21世紀の現代社会はどうでしょうか。例えば、今年1月に世界の政治家、実業家、研究者などが集まりスイスで開催されたダボス会議の主要な議題は環境問題とされました。オーストラリアで続いている深刻な大規模森林火災、中東地域で発生した洪水など世

界各地で異常気象が発生していますが、これらの原因の一つは人類の石油や石炭などのエネルギーの消費によって排出している二酸化炭素による温暖化（気候変動）であると言われていています。

原因不明の肺炎が中国から世界中に拡大しており深刻な被害が懸念されていますが、これは野生動物とヒトの接触による人獣共通感染症であるとされています。

私たちの生活に不可欠となっているプラスチックが廃棄後、海洋に流れ込み生態系に重大な影響を与えています。このような環境問題は全ての人類



が加害者であると同時に被害者であること、さらに地球上の全ての生物の生命を脅かすことであり早急な対策が求められています。いまだに有効な解決策は見出されていません。

また、世界最大の経済力、軍事力を持つアメリカではトランプ大統領の自国第一主義によって世界の安全保障は脅かされています。さらに世界第2位の経済力を誇る中国では対外的には覇権主義をとり、国内的には深刻な人権問題や経済不安を抱えています。

一方、日本国内を見ると、経済の先行きは不安であり、政治家や官僚などによる贈賄などの不透明なカネの流れや独裁的な政治運営によって政治に対する不信が広がっています。

このように諸君が遣わされる世は、2000年前にイエス様が指摘された状況と同じ、あるいはそれ以上に混沌とし、諸君に牙をむいてくる狼のような状況だといえます。

厳しい社会に歩みだすときに

学生時代は、講義の内容を理解し、レポートにまとめ、試験に備えるために苦勞の多かったことと思います。とりわけ卒業論文や学位論文の執筆は何度も指導教員から厳しい指摘を受け挫折しそうになるなど、厳しいこともあったのではないのでしょうか。

しかし、社会の厳しさはこれとは格段に異なり、あなたに悪意を持っている人びとが蠢いています。いわれなき

ハラスメントに苦しめられることもあるかも知れません。

窮乏の底から救い出すのはあなた自身

希望を持って社会に飛び出そうとしている諸君にこのようなことを申し上げるのは相応しくないかも知れませんが、現代社会は酪農讃歌の一節にあるように「窮乏の底」にあるといっても過言ではないように感じています。しかし、わたしたちの酪農讃歌は続いて「この国興せ」と諸君に語りかけています。

悪意と相互不信に喘ぐこの世を変えるのは、酪農学園大学を卒業した諸君一人ひとりの小さな、そして確かな取り組みなのです。勇気と強い志を持って宇宙船地球号のかけがえのない乗組員として社会の変革のためにそれぞれの務めを果たしてください。

それでも力が尽きて挫折しそうになったときは、酪農学園大学を訪れてください。教職員、後輩はいつでも諸君を笑顔で迎え、いつでも諸君に改めて勇気と元気を与えてくれます。これは諸君と酪農学園大学の約束です。そのことを忘れずにどうぞ人生という荒波のなかの旅を進んでください！

もう一つの言も添えて送別の辞とさせていただきます。

「Haste not, Rest not. : 急がず、休まず」(新渡戸稲造によるゲーテの言から)

「新たな希望を抱いて三愛精神に繋がる」



学校法人酪農学園宗教主事 朴 美愛

新たな繋がり

皆さん、卒業おめでとうございます。

別れと新たな「出会い」の季節になりました。今、皆さんは未来に対する新たな希望と共に未知の社会と世界への不安の中で過ごしているではありませんか。心配しないでください。大学は皆さんを社会へと送り出すと、社会には皆さんを迎える皆さんより先に社会へと送り出され、すでにあらゆる分野で活躍している先輩たちが待っているということです。そして、卒業したからこそ、今までとは異なる新たな繋がりが生れることを楽しみにしてください。その繋がりは皆さんが在学中には気付かなかった酪農学園の「建学の精神」である「三愛精神」と「健土健民」による強いものであります。

「出会い」を大切に

私は時々卒業生と会う機会があります。その時、私は卒業生によく、“卒

業後、キャンパス生活の中で一番心に残っていることは何ですか”と聞くのです。すると、私の前だからかも知れませんが、意外と“大学礼拝”と答える卒業生が多くいました。大学入学の時には入学式が礼拝形式になっていたことに驚いたのに、いつの間にか大学礼拝はキャンパス生活の中で心の拠り所になっていたと思います。それは、皆さんも同様かも知れません。私は「礼拝と聖書の学び」は皆さんが酪農学園大学に入学したからこそ経験できた「特権」だったと思います。その「特権」を卒業後も失わないようにして欲しいです。

酪農学園の創立者黒澤西蔵は「田中正造との出会い」によって足尾銅山鉍毒事件に関わり、逮捕され、収監中に差し入れられた「聖書」に出会いました。この「聖書」は、黒澤翁にとってただ一冊の本ではありませんでした。黒澤西蔵は、「聖書」から新しい「価値観」、新しい「世界観」に出会うこ

とが出来たということです。そして、酪農学園の「建学の精神」をキリスト教主義教育として聖書を基本とした人間教育にしたということです。それで、皆さんも「聖書との出会い」が出来たということです。その「出会い」をどのようにするかは皆さんの選択によることでしょう。

希望を抱いて

聖書の言葉がいつか皆さんにも大きな力になって欲しいとの願いと共に、聖書の一つの言葉を紹介します。この聖書の言葉は大学C1号館の正面の壁に英語で記されています。

「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(新約聖書・ローマの信徒への手紙5章3-4節の一部)

皆さんは未来への希望を抱いて入学し、その希望の実現のために様々な学びと共に新たな希望を抱いて世の中に出ようとしています。「希望の塔」を見ながら入学した皆さんが、時がたち今は新たな希望を抱いて「希望の塔」から世の中に出ていくということです。

しかし、苦難の世の中を直視しなければなりません。私たちは毎日のニュースによって常に世界中で起こっているあらゆる争いや戦争、事件や事故、災害などを見えています。いつの間にかニュースというと、まるで悪い知らせのようになってしまっています。どこを見ても「希望」はなかなか見えません。しかし、すべての「希望」がなくなっているわけではありません。「建学の精神」によって「神を愛し、人を愛し、土を愛する」ということを学んできた皆さんが、新しい社会、新しい時代の「希望」になっているからです。「希望」を抱いている皆さんがいるところで起きる少しの変化が、社会を少しずつ変えていくということです。皆さんの新たな歩みに神さまの豊かな祝福がありますようにと祈ります。



「希望の塔」(浦川利幸氏撮影)

考える力

食と健康学類 応用生化学研究室 長谷川靖洋



酪農学園大学ならびに大学院を卒業される皆さん、本日は誠におめでとうございます。また、皆さんを暖かく支えてこられたご家族や保護者の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

表紙の写真は本学の冬の風物詩になったヒンメリです。卒業生のみなさんは黒澤記念講堂1階ホールで直に見たことがあるのではないのでしょうか。では、ヒンメリの由来や背景についてはご存知でしょうか。ヒンメリの起源は古く、1100年代から始まり、北欧フィンランドの伝統的な工芸品として知られています。日照時間が短い冬のフィンランドではヒンメリは太陽とのつながりを感じられる光のモビール、また、太陽神としても飾られるそうです。

これから社会にでる皆さんは今よりも「考える力」が必要になります。「考える力」とは課題を見つけ、解決のた

めの過程を選択し、新しい価値を生み出す能力のことです。1100年代のフィンランドでは日照時間が短いという課題を見つけ、太陽を擬えたヒンメリを作成し、現在ではおしゃれなインテリアアイテムとして新しい価値も生み出されています。これからの社会はAI時代になることが予想されています。しかしながら、知識および情報を用いてどのようなアイデアを形にしていくかはAIではまだできません。皆さんの「考える力」にかかっているのです。また、コンピューターは想定外の事象にも弱いという弱点があります。想定外の問題を解決していくのはみなさんの「考える力」が重要になります。まだまだ、若い今だからこそ、今一度考える力を身につけるよう努力してみてください。

最後になりますが、改めて、ご卒業誠におめでとうございます。これからの皆さんのご活躍を心から祈念しております。

あ と が き

◇『出会い』81号(卒業式号)をお届けします。今回は4名の先生からのメッセージで編まれています。その内容は多岐にわたりますが、共通しているのは、時代や社会の現状が厳しいものであることを見据えた冷静な視点で

す。しかし、そこから感じられるのは、いたずらに不安を煽るということではなく、卒業生のみなさんを思い遣る温かな気持ちです。卒業生のみなさん、安心して新たな一歩を踏み出してください。(A.K)

酪農学園大学キリスト教委員会
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地
Tel. 011-386-1111 (代表)



酪農学園大学は、2014年度(公財)日本高等教育評価機構による大学機能別認定評価において大学評価基準に適合していると認定されました。



(酪農学園大学公式サイト)